43

三輪原『薬真途異語』と三輪試『大和医語』

友部　和弘・小曽戸　洋

刺絡家として著名な三輪東朔について、従来その医方を伝えるものは、弟子の伊藤大助によって著された『刺絡聞見録』（一八一七刊）が唯一であった。ところが昨年、東朔の知られざる著書『薬真途異語』（一八一一序刊）が大塚敬節旧蔵の修琴堂文庫より発見され（以下Aと記す）、第五二回日本東洋医学会と第一〇二回の本学会に報告した。また最近新たに武田科学振興財団杏雨書屋の藤浪剛一旧蔵『大和医語』（以下Bと記す）がAの異本であることを確認した。そこで両書を比較検討し考察を加え報告することとした。

両書とも書高は十八・六×幅十二・八cm、全十五丁と同様の小冊子である。Aでは題簽が欠損しており外題が不明であった。Bには「施本大和医語」の題簽が備わっており、おそらくはAにも同外題が存したものであろう。また「薬真途異語」という理解しにくい内題も「大和医語」という外題により「やまといご」と読むべきことがわかった。

Aには開巻首冒頭に東朔の号であろう「学古」の印影が摸刻され、「発語惑解」と題する序が一葉ある。次に「異翁語述」と題する文が三葉あり、「薬真途異語」と題する本文が一一葉ある。

一方、Bも開巻首冒頭に「学古」の印影が摸刻され同様の構成をなしている。またA・Bの本文「薬真途異語」においては、多少刷りの感じは異なるが、無罫で半葉一〇行、行二二字詰で計四六八七文字が記され、同版本であることが確認できる。

ところが序文の書式と記述においては、両書でかなり相違している。まず開巻首ではAが「発語惑解」とするのに対し、Bでは「発語解惑題言」と改められている。書式はAが無罫で半葉八行、行一三字詰で記され、「発語惑解」は一九三文字、「異翁語述」は五五七文字の計七五〇文字からなる。Bは本文同様の書式で記され、「発語解

惑題言」は四一五文字、「異翁語述」は一一六一文字の計一五七六文字と、Aより八二六文字増加している。

そこで両書の序文内容を比較してみると、例えばAが「…依テ行住座臥心ニ不随」とあるのに対して、Bは「…依テ行住座臥心ニ随ハズ変ジテ諸病トナリ百歳ノ命モ中路ニ絶ス」とあり、Aをもとにかなり多くの記述が追加されている。またAでは「此方法ハ即邃古之神聖窮民孜々汲々之真法也」と記するものを、Bは「今此方法ハ即邃古ノ神聖窮民ヲ救済シ玉フ処ノ真法ナリ」とし、理解しやすい文章に改められている。あるいはAとは一切関連のない文章が追加され、そこには一部本文の内容と重複している記述もある。以上大方、BはAをもとに、より詳しく理解しやすい文章に改められているものといえよう。

両書で最も注目すべき相違は、序文末尾の記述である。Aは「文化八辛未孟春（一八一一年一月）」と成立年を記し、その横に「皇都、隠医、三輪愿撰」とある。BはAと同一の成立年を記し、横には「皇都産、三輪試撰」とある。ここでBはAを改めたものにもかかわらず、同一の成立年が記されていることや、Bには「隠医」の文字が削除されていることなどには疑問が残る。またB初出の名称三輪試については次のことが考えられる。

藤浪著『医家先哲肖像集』所収の東朔の肖像画賛には、辞世の句とも読める和歌が記され、文政二年（一八一九）、行年七十三とあり、嫡男には大神能明があるという。また『近世医家人名録』初編（一八一九刊）では三輪東朔とし、翌年刊行された『今世医家人名録』では三輪東貞と改められ、「家に瀉血伝法有り」との記述もみられる。

以上のことから、東朔は一八一九年に没し、嗣子の東貞がその後を継いだものと考えられる。これより、Aの後に記されたBの撰者、三輪試が、東朔の嫡男大神能明で通称東貞である可能性も考えられよう。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）